

サケが遡上し、牧草地が広がる

# ウヨロ環境トラストが守る 北海道的里山

文・写真◎庄子 康 (北海道大学大学院農学研究院 准教授)



ウヨロ小屋

しょうじ やすし  
1973年、仙台市生まれ。専門は環境経済学。北海道の自然地域を対象として、自然環境と地域経済の両者が持続可能となるような管理・政策について研究を行っている。

## 北海道の森林と里山

森林に関わる全国的な学会では、北海道の森林は本州のそれとは異なったものとして扱われることがある。ことに里山の話題に関しては、話が北海道に及ぶこと自体ほとんどない。本州に住む人々にとつての北海道のイメージは、知床・大雪山などの原生的な自然環境や、十勝・根釧台地の広大な畑・牧草地であるから、里山自体存在していないと思われているのかもしれない。地域住民によって活用されている森林や雑木林を里山と言うならば、実は北海道にもたくさんある。里山がある。だが、地域住民が古くから連綿と生業を続けてきた場所を里山というならば、確かにそのような場所は北海道にはほとんど存在しないことになる。

今回紹介する白老町の里山を私が訪れるようになった当初は、そこが里山と呼ばれていることに特に抵抗感を感じていなかった。しかし、この場所のことを誰かに紹介する時には、里山という言葉は使わなかったように記憶している。かく言う私も北海道出身ではないので、やはり本州の里山とは何かが違う気がしていたのであろう。

そんな中、白老町の森林に強く「里山」を感じる場面に出くわすことになった。それは現場ではなく、あるイベントにおいてであった。このイベントは、白老町の空中写真を拡大して床に並べ、上から眺めてみようという試みであった。床に空

中写真が並べられると、「河川改修の前はここに川が流れていた」戦前はここに飛行場があった」など、特に年配の方々からさまざまな情報が飛び出してきた。どれも今の白老町だけを見ていては知ることでできない情報であった。そんな中、参加者の一人が「この森林はうちの父親が植えた昔はよくこの場所まで行ったものだ」とぼつりと言ったのである。その時、なぜか強く「里山」を感じたのである。歴史の重みなのか、世代を超えた森林と人との関わりなのか理由は分からないのであるが、本州の里山に感じるような感覚をその時感じたのである。

**白老町の里山とウヨロ環境トラスト**

今回は、この白老町の里山を一般の方でも気軽に満喫できる散策路の一つ、ウヨロ川のフットパスについて紹介したい。里山には必ずそれを利用したり、管理したりする人が存在している。現場の紹介を始める前に、まずは里山を管理する上で大きな役割を果たしているNPO法人ウヨロ環境トラストについて紹介したい。NPO法人ウヨロ環境トラストは、白老町を流れるウヨロ川において、放棄された森林を買い取って自分たちで管理するナショナルトラスト活動を行う団体として



ウヨロ川フットパスのコース

フットパス・コースとなっている春の牧場を歩く

2001年に設立された。2004年10月にはNPO法人を取得し、現在に至っている。トラスト活動を展開している「トラストの森」の手入れは、主に会員によって行われてきたが、一般の森林ボランティアも募集して、除間伐や枝打ち、植樹などの体験活動も開催するようになった。近年は実践力のある森林ボランティアを育成するために、専門家の指導による「森づくり実践講座」も実施している。この講座に、「ボランティアでしょ」などと気軽に参加しようものなら、気合の入ったトラスト会員にギリギリとねじを巻かれることになる。このように、ウヨロ環境トラストは年を追うごとに技術を高め、活動の幅を広げてきたのである。活動場所もトラストの森だけでなく、隣接する森林においても、その所有者と保全協定を結び、手入れを実施している。

**ウヨロ川のフットパス**

ウヨロ環境トラストは、ナショナルトラスト活動とその活動地の森林管理という、設立当初の目的のほかに、里山での環境学習活動にも取り組んでいる。その環境学習活動の舞台となるのが、これから紹介するウヨロ川のフットパスである。

トラストの森のすぐそばにはウヨロ川が流れている。ウヨロ川は胆振支庁管内の最高峰ホロロ山(標高1322m)の山麓を水源とし、太平洋に注ぐ延長約19kmの河川である。ウヨロ環境トラストの環境学習活動として、自然ウォーキング

や子ども自然体験活動が開始されると、自然豊かなウヨロ川にフットパスを整備してはどうかということになった。その後、ボランティアの力も借りながら、ウヨロ川左岸に新たに歩道を開設し、一般道路や管理用道路、萩の里自然公園の遊歩道、牧場などをネットワークした約14kmの「ウヨロ川フットパス」が完成した。注意しておきたいことは、フットパスがある土地はウヨロ環境トラストの土地ではないということである。ウヨロ環境トラストが土地所有者と交渉し、了承を得たからこそ、このフットパスが提供されているのである。そこには土地所有者の理解とともに、土地所有者を理解させるだけのウヨロ環境トラストの熱意を見ることができると。

フットパスは、雑木林、カラマツ林、河畔、牧場、丘陵地など、自然豊かな北海道の農山村景観、つまり北海道の里山を通っている。特に大きな見所は、春の牧場と秋のサケの遡上・産卵である(牧草地とサケという要素は、本州の里山にはなじみがないので、里山と紹介されることにやはり違和感はあるかもしれない…)

フットパスの中間地点、オーシャンファーム付近では、牧草地の脇をフットパスが通っている。春には青々とした牧草地の向こうに、まだ雪をかぶったホロホロ山を望むことができる。長い冬をすごしてきた道民にとってはこたえられない景色である。またこの付近のウヨロ川河畔からは、秋になると支流の孵化場に上ろうと合流点に集まった数え切れないほどのサケを見ることができ

きる。あまりにサケが多いので、サケが人間の気配を感じて動くと、川全体が大きくうごめくことになる。ウヨロ川本流では自然産卵するサケも見ることができ、実習で学生とともに秋のフットパスを歩いたのだが、ちょうどつがいのサケと一緒に産卵床を作っていた。初めてサケを見る学生も多く、産卵の決定的シーンを見ようと学生は釘付けになっていた。札幌近郊でこれだけダ



ウヨロ川のサケの遡上

イナミックなサケの遡上を見ることができるところはそう多くないであろう。

一方、このフットパスを歩くと別の意味でも勉強をさせてもらえる。ウヨロ川が形作る扇状地には豊富な砂利が存在し、フットパスのすぐ脇でも砂利採取が行われている(フットパス自体も砂利採取跡地を通っている)。里山を保全する現場の脇で、森林が伐採され、砂利が採取されていることは確かに気にはなる(もちろん、砂利採取は合法的な経済活動である)。しかし、それをマイナスイメージと捉えないところがウヨロ環境トラストである。土地所有者との交渉の上、この砂利採取跡地で植林活動を開始したのである。必ずしも植林はうまくいっていないが、立派に育っているいくつかの苗を見ると、自然の力強さとともに、ウヨロ環境トラストのメンバーが里山保全にかける意気込みも感じることができると。

### おわりに

先に述べたように、白老町の里山は本州の里山を基準に考えると、里山ではないのかもしれない。牧草地やサケの遡上などは、本州の里山の要素には恐らく含まれていないだろう。しかし、北海道では北海道らしく、白老町では白老町らしく、地域の自然環境とそこに住む人々との関係は醸成されている。将来、そこが里山と呼ばれるかどうかは別として、少なくとも味わい深い場所となっているに違いない。